



「気象のことば 科学のこころ」

廣田 勇 著
成山堂書店

2007年5月, 190頁

1600円 (本体価格)

ISBN978-4-425-55161-3

廣田 勇京大名誉教授が、気象ブックスのために書き下ろしたエッセイ集である。著者は、長年、気象研究の第一線で活躍し、また本学会の理事長を9年間務めた。今年になって公務から解放され、自由な気分になりながら、自然科学のみならず、美術、文学、社会問題に対する独自の視点を示したのが本書である。前書きによれば、「時間をかけて貯えてきた数多くの知識や経験を、もう一度自分の好みにあった方法で組みなおしてみると、そこにはこころ豊かな新しい世界が生まれてくる。……それまでは一見別の世界のことだと思われていた他のことからの間に、ある種の類似性・親和性のようなものが相似形のように浮かび上がってくるに違いない。」というわけで、「気象ブックス」シリーズに入っているが、気象の解説書というよりは文学に近い。

著者は、同じ気象ブックスシリーズで、「気象の遠近法」(1999)を出版している。そこでは、グローバルな視点でみた大気環境の構造が、独自の語り口で述べられていた。野球や詩歌などの比喩がたくみに使われていたが、それは、あくまで、説明のための脇役であった。本書では、その脇役が主役になった感じがする。

エッセイであるから、知識を体系的に述べているわけではない。しかし、多少のニュアンスの違いによって、内容は以下の3部構成になっている。

第1部「気象のことば」

第2部「我田引水」

第3部「科学のこころ」

第1部では、「なぜ気象ということばの中にゾウがいるのか」という意表をついた問題設定を行うことにより、語源を理解することによって、全く違う意味の間に、ある種の関係があることを示す。私は、本書

で、熱帯 (tropics) と流体力学に出てくる等方性 (isotropy) が同じ意味の言葉から出ていることをはじめて知った。著者は言葉によほど興味を感じるらしく、知らない言葉に出会うと語源まで遡って理解しないと気がすまないようである。まさに、研究者魂というべきか。

第2部でも言葉にこだわる。日常生活で使われる言葉を取り上げて、それが専門的な研究を行う場合の姿勢に深く関係していることを示す。自分の専門領域に話を引き込むので、「我田引水」なのである。大学院生が研究を行ううえの心得として、参考になる内容である。

第3部では、著者の心に響いたエピソードを集めたものである。ここでは、論理的思考の重要性が強調される。自然科学は理性によって論理的にもの考えるが、一般社会では、必ずしもそうっていない。いい加減な論理がかなりまかり通っている。著者は、妥協することなく、この風潮を批判する。特に、コンピューター・シミュレーションの偏重と、その延長上にある地球温暖化問題が組上に上げられる。なんでも地球温暖化を原因にしてしまう社会風潮を「地球温暖化症候群 (省略する場合は地温症)」と呼ぶことを提案している。

第1部は11テーマ、第2部は13テーマ、第3部は10のテーマから構成されるから、個々のエッセイは平均約6ページの短い内容である。本書を読んで、指揮者の團伊久磨氏のエッセイ「パイプの煙」を思い出した。才気煥発という点、読んでいて、笑いがこみ上げてくる点が似ている。するどい批判であっても、どことなくユーモアを感じさせる。廣田研究室のお茶の時間に、大学院生を相手に雑談している著者の姿が目につく。

「気象のことば 科学のこころ」という率直な表題と対応して、文章もこころよいリズムをもって読みやすい。寺田寅彦に代表される科学者の随筆は、いまだ健在という感じがした。本書には、自然研究の基本姿勢に関するメッセージがいろいろ示されているので、気象学をめざす大学院生にぜひ読んでほしい本である。

(放送大学 木村龍治)